Yumenodai75 兵庫県立夢野台高等学校第２学年　学年通信第11号

2022.1.12　発行

夢を実現するために

２年５組担任

年が改まり令和４年(2022年)となりました。新年おめでとうございます。新型コロナウイルス感染症の新たな変異種であるオミクロン株の感染状況が気になるところですが「手洗い、マスクの着用、3つの密を避ける」などの基本的な感染対策をこれまでどおりしっかりと続けることが大切だということです。

さて、本年は75回生の皆さんにとって、夢を実現するために学力を伸ばす大事な１年です。自分は何をすべきか考え、実行してください。

マサイの子供たち(2018年8月)

ケニアの首都ナイロビは東アフリカを代表する最も繁栄している大都会で、人口は 336万人である。中心地のシティセンター地区は高層ビルが林立しビジネスマンにあふれ、ここがアフリカであることを忘れさせるほどだ。ほぼ赤道上の街だが標高約1600mに位置し、年平均気温は17.5度と過ごしやすい。また、ナイロビはマサイ語で「冷たい水」という意味で湧き出る水は、ほどよく冷たい。(ナイロビは 1899 年に、植民地政策の一環として英国によって造られたウガンダ鉄道の給水および補修の拠点として建設された都市である。高原にあり冷涼でさわやかな気候を持つこと、マサイ語の「Enkare Nairobi：英語<place of cool waters>」の名の通りに清潔で豊富な水が得られることなどが、ナイロビが拠点となった理由だといわれている。)

マサイの小学校

ナイロビのホステルで知り合った英国のNGO(非政府組織)団体に所属するマルヴィナさんがボランティアでマサイの小学校の教師をしていると聞き、その小学校に私も行くことになった。都会の片隅にあるマサイ人集落。もともとナイロビは 100 年前には影も形もなく、サバンナ(草原)とブッシュ(茂み。低木)があるだけのマサイ人の生活圏だった。この広いサバンナで移動生活していたマサイ人は、都市の拡大、国立公園からの締め出しなどを受け窮地に追い込まれている。活路を求め流れ流れていくうちに、住宅街の狭い空き地に住むようになったのだろう。

それでも彼らは、牛糞を固めた伝統的家屋に住んでいる。この集落に小さな学校があった。小学校を卒業した人が先生となり、子どもたちにケニアの公用語である英語を教えて

いる。（ケニアには 40 以上の部族語がある。国語はスワヒリ語であり、公用語は英語である。このために子供たちは英語も身に付ける必要がある。）

マサイ人の集落では、子供たちにできるだけ援助をして、高い教育を受けさせようと努力しているそうだ。しかし、現実は厳しく子供たちは、小学校を卒業することさえ困難なこともあるという。

マサイの子どもたちの夢

「あなたの夢は何ですか？（What is your dream?)」とマルヴィナさんが子供たちに英語で聞いていた。子供たちは元気よく答えていた。

「会社の社長になりたい。お金持ちになって、お父さん、お母さんにたくさん牛をかってあげたい。」と男の子が答えた。

「一生懸命に勉強して獣医になりたい。牛が病気になっても助けることができるから。」と女の子が答えた。

「サッカー選手になって有名になりたい。そうすればお金を稼げて、たくさんの牛をかうことができるから。」と男の子が答えた。

「大人になったらトラックが運転できるようになりたい。」と答えた男の子がいた。マルヴィナさんが理由を聞くと「トラックがあれば、牛を簡単に草原に連れて行けるから。」と彼は答えた。

将来、何になりたいかは様々だが、その理由はすべて牛に結びついていた。

「そんなに牛が好きなの？」と聞くと、みんな「大好き。」と答えた。彼らにとってこの世でいちばん幸福なことは多くの牛を持つことで、何よりも大切なのは牛を守ることなのだ。

工場や渋滞している自動車の横を何十頭もの牛やヤギを引き連れて、長身のマサイの青年たちがゆっくり歩いている。牛を守るためならどんな困難や戦いも厭わない勇者たちだ。変化の激しい時代の中でマサイの生活はどのようになっていくのだろう。どんなに時代が変わっても、牛はマサイにとって宝であり続けるのだろうと私は思った。

ところで、あなたの夢は何ですか。

（参考文献）　○『ケニアを知るための 55 章』 松田 素二 ・,津田 みわ（著・ 編集） 明石書店　○『Lonely Planet Africa』Lonely Planet

行事予定

1 月 13 日(木)小論文ガイダンス　1 月 15 日(土)16 日(日)進研模試

1 月 22 日(土)英検(１次)　 1 月２７日(木)人権学習